



10 七宝四季花鳥図花瓶

並河靖之  
一点

明治三十二年（一八九九）  
有線七宝  
径二五・〇、高三六・〇

透明感のある黒色釉を背景に、繊細緻密な有線七宝でサクラ、アオモミジ、レンギョウ、モクレン、ナデシコ、ノイバラ、ツツジ、シヨウブ、キョウチクトウ、ムクゲ、リンドウ、ハギなどの四季の花々、スズメ、メジロ、ルリビタキとみられる鳥が表わされている。サクラの花やアオモミジの葉は光線による色の変化を、その他の植物も花や葉の表裏で色味を変えるなど、微細な色調の変化によって一日の時間の変化をもとらえようとしているかのようである。また、釉薬を区画する役割でしかなかった植線を、太さや形状を自在に変化させることによって、植線自体が日本画の墨線のように筆意を表わす新たな役割を担うこととなったのも注目される点で、太い植線に光が当たると漆黒の背景に金色に輝く線が現れる効果をもたらししている。

なお、この作品では、通常では金属製の覆輪が取り付けられる口縁部を、制作当初は新開発の技術である無覆輪にしようと試みられた。結果的に無覆輪は実現することができなかったが、黒色釉と色味の近い赤銅による丸みを帯びた覆輪が取り付けられることとなった。だが、この覆輪の存在を感じさせない口縁部の作りによって、それまで花瓶の首、胴、胴裾を分けていた文様帯をなくし、図様を一つの絵画的世界のなかに収めたことも、本作品の大きな特徴である。

本作品は、一九〇〇年（明治三十三年）のパリ万国博覧会に出品するため、宮内省の依頼を受けて、当時の名工たちが制作した作品の一つである。作品番号9《七宝舞楽図花瓶》から約二十年の歳月を経て、並河が到達した有線七宝の新境地である。作品の大きさ、文様の緻密さ、有線七宝の技術など、並河靖之を代表する作品として知られている。



アオモミジの幹は、輪郭線となる植線の太さを筆で描いたように肥瘦をつけられ、植線に光が当たれば黒色釉のなかで幹の線が眩い金色に浮かび上がる。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

## 明治美術の一断面——研ぎ澄まされた技と美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 82

編集 宮内庁三の丸尚蔵館  
制作 株式会社 東京美術  
翻訳 黒川廣子  
発行 宮内庁  
平成三十年十一月三日発行

© 2018, The Museum of the Imperial Collections, Sanmomaru Shozokan